

学術会議と医歯薬アカデミーへの想い

金岡 祐一

- (1) 医歯薬アカデミーは（金澤一郎会長の「発刊の辞」に述べられてあるように）、当時の七部制・学術会議の第七部会員OBからなる任意学術団体である。日本の学術振興に期待され、今までアカデミーに協力下さってきた賛助会員各位の御理解と御支援が基礎にあり、あらためて厚く感謝と敬意を表する。
- (2) 学術会議はその活動の目玉の一つとして「研連活動」を始めたが、例によって事務局からの予算支援は無し。アカデミーはこの実情に立腹し、それを支援・補充しようとする会員の学術振興精神の自発的発露の表現であった。それを実際に発動し、出発したのが当時の八木國夫・学術会議副会長とそれに協力した岡田晃会員の「見識と行動力」の功績であった。
- (3) アカデミーは昭和62年発足の運びとなり、初代会長に名取禮二博士、2代会長に八木國夫博士、平成13年から岡田博士が就任している。八木、岡田両氏は、まさにアカデミーの「始祖」であり、岡田博士は今日までアカデミーに熱意を注ぎ、まさに「代表者」であると思う。私も会員として当時、賛助会員増強に微力をつくした。アカデミー成立の経過は、第七部部長であった私が編集した「第七部のあゆみ」5頁に岡田氏により述べられている。以来、アカデミーの主旨と活動は一貫し、とくに上記の第七部関係研連シンポジウムへの多年の助成の業績は、関係者に銘記されるべきである。当局の無勉強・非力からみて、アカデミーの存在意義は重いと思う。
- (4) 私は薬学会から推薦され第七部へ入会した1991年、第七部（医・歯・薬）は35人（薬学と歯学はそれぞれ3人のマイナーグループ）。開会の初日にブツツケ本番、会員投票というふしぎな仕組みだが、岡田氏は圧倒的支持で部長当選（その基礎には同氏のそれまでの実績あり）。ところが部長推薦の幹事役は、何と初年の私が指名された。この岡田博士による「引立て」が、このあと私の次期副会長、ついで会長役につながり、私も学術会議で多少の仕事ができた訳で、御厚意に感謝申し上げるほかはない。
- (5) 17期・第七部長の3年の想いでは尽きず、有力会員諸兄の御協力と御交誼に厚く感謝。（例えば国際パワー抜群の黒川清会員（後の会長）のお世話でアメリカとミニシンポを開催したこともその一つである。
- (6) 学術会議の七部制が三部制に変わったことは、「学問の総合化」の流れからみれば当然のことなのであろう。我国の積弊ともいえる大学・学部間の乖離状況も改善を期待された。しかし急速な変化への対応は難しくもあった。会員の期待に応えるべく私なりに渾身の努力で3期を勤めあげ、仕上げに「日本学術会議第七部のあゆみ」を編集・出版、総括した。これは学術会議史上の必要文献となったのは、喜びである。
- (7) しかし現在の学術会議の存在と活動は、依然、国民によく見えていないのではないかと、気になっている。私は3期を通じ、一貫して学術会議の決定機関である運営審議会メンバーであった責任を感じ、例えば読売の「論点」に2度、学術会議の役割について国民に対し論ずるなどの努力はした。一方個人としては、歴代の会長（近藤、伊藤、吉川の英才3氏）とのお付き合いから、多くを学び得たことを感謝している。
- (8) アカデミーは日本学術発展への熱意は不動ながら、七部制から三部制への制度変更を経て、旧

七部メンバーからすれば第1期の老齡チームとして経過するのはやむをえない。当分は高石氏(私が部長時の幹事)や瀬戸氏等、お元気なOBに人事をはじめ今後を託したい。さらに今後は新制度の下で、政進が必須。賛助会員の理解・協力をつなぎとめつつ、想いは同じ、我国の學術振興を目標に、アカデミーの組織強化・維持と新制度の中での会員増強の工夫に、あらためて期待したい。

●プロフィール

金岡 祐一

日本医歯薬アカデミー名誉会長

第6代日本医歯薬アカデミー会長

日本學術會議第17期第七部長

日本學術會議第15～17期第七部会員

北海道大学薬学部長

日本薬学会会頭

富山国際大学学長

富山短期大学学長

富山国際学園理事長

北海道大学名誉教授

富山短期大学名誉学長